

2012年11月22日／浪宏友ビジネス縁起観塾

真実の証明

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「見宝塔品」

1. 見宝塔品のあらすじ

- (1) 釈迦牟尼世尊が、靈鷲山（りょうじゅせん）で、妙法華経の説法をなさっておられると、目の前の大地から、七宝（註：金・銀・瑪瑙・瑠璃・真珠・珊瑚・琥珀その他の宝石類）で飾られた巨大な宝塔が出現し、空高くにとどまりました。
- (2) 宝塔の中から大きな声が出て釈迦牟尼世尊を讃え、釈迦牟尼世尊が説いた「平等大慧・教菩薩法・仏所護念の妙法華経」はすべて真実であると証明しました。
- (3) 宝塔の中には多宝如来がいらっしゃることを、釈迦牟尼世尊から聞いた弟子たちが、多宝如来にお会いしたいとお願いしました。
- (4) 多宝如来は十方の仏が集まったのちにお姿を現わすことを、釈迦牟尼世尊から聞いた弟子たちが、十方の仏さまにも会いしたいとお願いしました。
- (5) 釈迦牟尼世尊が靈鷲山のまわりに広い場所を作り仏さまをお迎えしましたが、場所が足りませんでした。
そのまわりにさらに広い場所を作り仏さまをお迎えしましたが、まだ足りませんでした。
さらにそのまわりに広い場所を作って、ようやくあらゆる仏さまをお迎えすることができました。
- (6) 十方の仏がすべて集まったところで、釈迦牟尼世尊は虚空に上り、空高くとどまっている宝塔の扉に手をかけると、厳かな音を響かせて扉が開きました。
- (7) 扉が開くと、宝塔の中央に多宝如来が座しておられます。
- (8) 多宝如来は半座を分けて釈迦牟尼世尊を招き入れました。釈迦牟尼世尊は即座に塔に入り、多宝如来と並んで坐られました。
- (9) 靈鷲山（地上）にいる弟子たちは、はるかな虚空にいらっしゃる釈迦牟尼世尊・多宝如来・十方の諸仏を見上げ、自分たちもお側に行きたいと願いました。すると、釈迦牟尼世尊は即座に弟子たちを虚空に上げてくださいました。
- (10) 釈迦牟尼世尊は、人々に向かって呼びかけました。

「妙法蓮華の教えを、未来永劫に残しておきたいのです。誰か、娑婆世界で妙法蓮華経を説く人はいませんか。これは非常に困難なことですが、是非、行ってほしいのです。この役目を担ってくれる人は、自ら名乗り出て誓いを立ててください」

2. 宝塔の意味

(1) 宝塔は仏性の象徴

「多宝如来」は、「真如そのもの」「真理の全相（真理の完全なすがた）」の象徴です。

「真如」「真理」を人間に当てはめたものが「仏性」です。宝塔は仏性の象徴です。

(2) 宝塔は大地から湧きだした

〈天〉は人間から離れた理想の世界、〈地〉は人間と密着した現実の世界をいいます。

現実の自分自身（地）の中にある仏性（宝塔）を、自分自身で自覚したことを、塔が大地から湧きだしたと表現しているのです。

(3) 宝塔は虚空にとどまった

「虚空」とは「理想」です。

「大地」から湧き出して「虚空」にとどまるというのは、現実から出発して理想に到達することを表しています。

3. 真理の証明

多宝如来は、釈迦牟尼世尊の説法が真実であることを証明しました。

仏教では、文証（もんしょう）・理証（りしょう）・現証（げんしょう）の三つの証明が揃えば、真実であるとしています。

(1) 文証

教えが経文の上で明らかにされていること。

「経文」とは、「責任ある形で公にされている文章」と解釈することができます。

(2) 理証

教えの内容が普遍的な理にかなっていること。

「普遍的」とは、「いつでも、どこでも、だれにもあてはまる」ことです。

(3) 現証

教えのとおり、理のとおり現象が生じること。

現証は、三つの証明のなかでも、もっとも重要な証明です。

(4) 現代科学の態度

現代科学では、理論と現象が一致することが求められます。その意味で、仏教の態度と現代科学の態度は、軌を一にしていると考えられます。

4. 妙法華経

(1) 平等大慧

すべての衆生がひとしく仏となることができると見とおす智慧を「平等大慧」と言います。

(2) 教菩薩法

すべての人に菩薩の道を示す教えを「教菩薩法」と言います。

(3) 仏所護念

もろもろの仏が秘要として護ってこられた教えを「仏所護念」の教えと言います。

ここでの「秘要」は、「秘密」という意味ではなく「大切な奥義」という意味です。

(4) 妙法華経

平等大慧・教菩薩法・仏所護念の教えは、妙法蓮華の教え（妙法華経）です。

この場合の「妙法華経（妙法蓮華経）」は、固有名詞ではありません。「仏性（存在の本質）に根差した人間のため、人間関係のための教え」を指す普通名詞です。

5. 十方の仏

釈迦牟尼世尊は、多宝塔の扉を開けるに先立って、十方の仏を集められました。十方の仏とは、釈迦牟尼世尊の分身としての仏です。これを「分身仏（ふんじんぶつ）」と言います。

真理の智慧を得て、真理に合った生き方をしながら、人々を真理に導く人々は、釈迦牟尼世尊の分身仏であると考えられます。

7. 釈迦牟尼世尊と多宝如来が並ぶ

(1) 扉を開く

釈迦牟尼世尊は、分身の仏さまがすべて集まったのを見届け、虚空にのぼって宝塔の扉に触れますと、扉が重々しい響きとともに開きました。

そこには、多宝如来（真如）が身動きもされずに坐っていらっしゃいます。

(2) 多宝如来が釈迦牟尼世尊を讃える

多宝如来は「すばらしい。まことにすばらしい。よくぞ釈迦牟尼如来は、快くこの法華経をお説きくださいました」とおっしゃいました。

真如（多宝如来）が真如を説く人（釈迦牟尼世尊）を讃えたわけです。

(3) 二仏同坐

宝塔の真ん中に坐っておられた多宝如来は、すぐに半坐を開けて、釈迦牟尼世尊を招き入れました。釈迦牟尼世尊は即座に多宝如来と並んで坐られました。

多宝如来（真如そのもの）と釈迦牟尼如来（真如を説く人）は、同じように尊いのです。

8. 虚空での説法

(1) 虚空に引き上げていただく

霊鷲山（地上）にいる弟子たちが、虚空におられる多宝如来・釈迦牟尼如来・十方の仏さまのおられる虚空に行きたい願うと、釈迦牟尼世尊は、すぐに弟子たちを虚空に引き上げてくださいました。

ここから虚空での説法（虚空会）が始まります。

(2) 釈迦牟尼世尊の呼びかけ

釈迦牟尼世尊は、人々に呼びかけました。

「いまこそ、もろもろの大衆に告げます。わたしが世を去ったのち、（この娑婆世界で）しっかりとこの教えを護持し、読誦する者はだれだれですか。その人は、いまわたしの前で誓いのことばをのべなさい」（『法華三部経 各品のあらましと要点』p.116、括弧内は筆者）

理想の境地に入ったとたんに、釈迦牟尼世尊は、苦悩に満ちる娑婆世界を救うお話を始められたのです。

(3) 令法久住（りょうぼうくじゅう）

「もろもろの弟子たちよ。だれがこの教えをよく護ってくれますか。いまこそ大願を起こして、この教えを未来永劫にのこしてほしいものです。」（同p.117）

「教えを未来永劫に残す」ことを「令法久住」といいます。

真理は永久不変ですが、真理の教えは、消えてしまう可能性があります。

真理の教えが消えてしまったら、だれも真理を学ぶことができず、真理に合った生きかたができなくなってしまいます。

この呼びかけに対して菩薩たちがおこたえします。その様子は、勸持品に記されています。

9. 二処三会（にしよさんえ）

(1) 二処三会

① 妙法蓮華経の序品から見宝塔品の途中までは、弟子たちは霊鷲山（地上）で釈迦牟尼世尊の説法を聞いていました。これを地上会（ちじょうえ）と言います。

② 見宝塔品の途中で弟子たちが虚空に上げられ、囑累品までは弟子たちは虚空で釈迦牟尼世尊の説法を聞きます。これを虚空会（こくうえ）と言います。

③ 薬王菩薩本事品から普賢菩薩勸発品までは、弟子たちはふたたび霊鷲山（地上）で釈迦牟尼世尊の説法を聞きます。地上会に戻るわけです。

こうして、地上と虚空の二カ所で三回の説法が行われるので、これを二処三会と言います。

(2) 二処三会の意味

- ① 霊鷲山の地上は現実世界です。釈迦牟尼世尊は、まず、現実的な問題を解決する教えからお説きになったのです。
- ② 虚空は、真理に生かされる理想的な世界です。釈迦牟尼世尊は、境地の進んだ弟子たちに理想を示し、ぎりぎりの真実の悟りに導きます。
- ③ 弟子たちが深い悟りに達したら、現実に戻って、その悟りを現実世界で実践し、すべての人々を真理に導くことをすすめるのです。

10. 二処三会から見た妙法蓮華経の内容

(1) 地上会＝智慧の教え

法華経の最初のほうでは、この世の成り立ちはどうなっているのか、人間とはいったいどんなものであるか、人間と人間の関係はどうあるのが正しいかということを見極める智慧が説かれています。

(2) 虚空会＝慈悲の教え

そういう智慧が身についてきたら、いよいよ理想の境地を示されました。すなわち、久遠本仏と一体となる境地です。

久遠本仏のみ心は、あらゆるもののいのちを生き活きと発現させ、すくすくと伸ばしてあげようという慈悲の心です。ここでは、慈悲が説かれているのです。

(3) 地上会＝実践の教え

その悟りに達したら、また現実に戻り、その悟りをこの世で実践にうつし、自分の人格を完成しながら、多くの人々に悟りを及ぼしていきます。

ここでは、慈悲と智慧が渾然となった実践が説かれているのです。

【参考】六難九易（ろくなんくい）

釈迦牟尼世尊の滅後に妙法蓮華經をとき弘めることは、計り知れないほど困難であること。だからこそ、妙法蓮華經を弘める功德は甚大であると、六難九易によって説かれました。

以下、「○数字」は九つの「まだまだ易しいこと」、「●数字」は六つの「難しいこと」です。

- ① 世の中にある数えきれないほどの教えの、すべてを説くことは難事のようにけれども、まだまだ易しい。
- ② 世界の中心にある須弥山を手にとって、他の世界に投げることは不可能とおもわれるけれども、まだまだ易しい。
- ③ 足の指でこの世界を動かし、遠くの世界に投げやるのはできそうもないとおもうだろうけれども、まだまだやさしい。
- ④ 世界の一番高い所に立って、人々のために、妙法蓮華以外の無数の教えを演説するのは、不可能とおもわれるだろうけれども、まだまだ易しい。
- ① 釈迦牟尼世尊が滅度したのちの悪世で、この法華經を完全に説くことのほうが、はるかに難しい。
- ⑤ 手に虚空全体をつかんで、自由自在にとびまわるのは不可能とおもわれるだろうけれども、まだまだ易しい。
- ② 釈迦牟尼世尊が滅度したのちに、妙法蓮華の教えを自分も書いてたもち、人にも書写させることのほうが、はるかに難しい。
- ⑥ 大地を足の爪の上ののせて、梵天（世界で一番高いところ）まで飛び上がるのは、まだまだ難しいとはいえない。
- ③ 釈迦牟尼世尊が滅度したのちの悪世で、しばらくのあいだでも妙法蓮華の教えを読むことのほうが、はるかに難しい。
- ⑦ 世界が焼けつくす時代に、乾いた草を背負って大火のなかに入り、しかも焼けないでいることはむずかしいといっても、まだまだ易しい。
- ④ 釈迦牟尼世尊が滅度したのちの、この教えをたもち、ただ一人の人にでも説くことのほうがはるかに難しい。
- ⑧ 釈迦牟尼世尊が説いた数多くの教えを人々に説き、教えを聞いた人々に六種の神通力をそなえさせることも、まだまだむずかしいとはいえない。
- ⑤ 釈迦牟尼世尊が滅度したのちの妙法蓮華の教えを聞き、その意義を徹底的に質問して、その上で信受することのほうがはるかに難しい。
- ⑨ ある人が、数えきれないほどの人々に教えを説いて、あらゆる迷いを除き、六種の神通力を得させるような功德をあらわしたとしても、まだまだむずかしいとはいえない。
- ⑥ 釈迦牟尼世尊が滅度したのちに、妙法蓮華の教えをあがめ尊んでしっかりとたもつことは、はるかにむずかしい。